

現代美術と町おこし： 現代美術は地域再生の起爆剤となり得るか？

成蹊大学非常勤講師

人見伸子

プロローグ

現代の国際化と情報化の流れの中で、東京を中心とする首都圏では、時代と地域の壁を超越したさまざまな美術展が開催されるようになった。しかし圧倒的な集客を誇るのは、西欧の有名画家や美術館の展覧会であり、国宝を中心にした日本美術の展覧会等である¹。20世紀以降のいわゆる「現代美術」と総称される作品は、たとえば東京都現代美術館や国立新美術館などの大規模館で、積極的な企画が行われているが、一部の人気作家を除けば、観客の反応は冷やかかといった状況が続いている²。

評価が確立した芸術家や作品の展覧会、あるいは話題性のある企画に頼らざるを得ないのが日本の美術界の現状であるが、こうした中で、あえて現代美術を積極的に取り上げた企画を打ち出す美術館や団体が、地方に増えつつある。とくに特徴的なのが現在活躍中のアーティストが参加する国際的な芸術祭を催し、それを地元の活性化につなげようとする動きである。たとえば福岡県の「福岡アジア美術トリエンナーレ」(1999～)、新潟県の「大地の芸術祭：越後妻有アートトリエンナーレ」(2000～)、横浜市の「横浜トリエンナーレ」(2001～)、新潟市の「水と土の芸術祭」(2009～)、名古屋市の「あいちトリエンナーレ」(2010～)、香川県の島を中心にした「瀬戸内国際芸術祭」(2010～)など、すでに10年以上の歴史を刻み、着実に地元に着実に定着しつつある芸術祭も存在する。

本論はその中の「大地の芸術祭：越後妻有アートトリエンナーレ」「瀬戸内国際芸術祭」を取り上げ、まずその成り立ちを検証し、実際の状況を報告するとともに、今後の課題や問題点を考察する試みである³。

- 1 芸術祭の成り立ち
- 2 2つの芸術祭の報告と作品検証
- 3 問題点の指摘と今後の課題

1 芸術祭の成り立ち

1-1 大地の芸術祭

すでに10年以上の歴史をもつ「大地の芸術祭：越後妻有アートトリエンナーレ」の会場となるのは、新潟県の南端に位置する、約760平方キロの広大な地域である。当初は十日町市、川西町、中里村、松代町、松之山町、津南町の6市町村だったが、2005年の合併で、津南町以外は十日町市に編入された。面積は東京23区よりも広いが、2010年現在で人口は75,000人、しかも65歳以上の高齢者が3割を占めるといふ、高齢・過疎化の問題を抱えた日本の典型的な農村地帯である⁴。

「大地の芸術祭」に先行する形で、地域振興を目指す「越後妻有アートネットワーク整備構想」が立ち上がったのは1990年のことであった。96年からは新潟県高田市（現上越市）出身のアートディレクター、北川フラム（1946～）が正式にプロデューサーとなる。98年には里山や村を撮影した写真とそれに添えた言葉のコンテスト「越後妻有ステキ発見」を企画し、地元住民の理解と協力を得る試みが行われた。その後、幾多の紆余曲折を経て⁵、2000年に第1回の芸術祭を実施。3年ごとに開催のトリエンナーレとして順調に回を重ね、今年2012年で5回目を迎えた。過疎地を現代美術で活性化させる試みとしては、老舗といえるだろう。美術ジャーナリスト村田真氏が「越後妻有方式」と呼ぶこの試みは、再び北川フラムが関わった「瀬戸内国際芸術祭」にも引き継がれ、我が国の現代美術のひとつの潮流となりつつある⁶。

ところで「大地の芸術祭」を支えてきた基本理念とは、一体どういうものであろうか。当初からのプロデューサー、北川フラムが掲げる理念は、要約すると以下の通りである⁷。

①人間は自然に内包される。

十日町市を中心にしたこの地域は、川沿いに開けた市街地を除けば、大部分がブナ林など豊かな緑に覆われた里山であり、山間に切り開かれた田畑が散在する。したがって芸術祭では、こうした自然を展示空間とする作品を数多く見ることができる。都市部の彫刻庭園のように人の手が加わった空間ではなく、住民が普段生活する空間が、作品を展示する晴れの舞台となる。

②地域・世界・ジャンルを超えた協働

1960年代に学生運動を体験し、社会の改革に関心を持ち続けた北川フラムが、現代美術のプロデューサーとして目指したのは「地域、世代、ジャンルを超えた人々の協働」である⁸。「過疎地/高齢者/農民」および「都会/あらゆる世代/アーティスト」といった言葉で括られる2つのグループの人々が、その違いから生じるさまざまな葛藤や軋轢を乗り越えて、比較的短時間で作品を立ち上げていく。両者の周辺には「こへび隊」⁹と名付けられた若者（都会の学生が中心）がボランティアとして参加し、制作展示ばかりでなく、芸術祭期間中の裏方として活動する。

③集落と世界

「大地の芸術祭」には、初回から多数の海外アーティストが参加している¹⁰。そうした各国の多様な価値観をもつ人たちが越後妻有の集落を訪れ、地元住民の協力を得ながら、作品を制作する。

越後妻有の200を越える集落に根ざしつつ、国際的な視点や価値観を持つ作品を生み出していく。この地元集落 local と国際性 global の共存が、北川フラムの理念の根底にある。

④サイト・スペシフィック Site Specific

「サイト・スペシフィック」とは、アーティストが現地を訪れ、その場を活かした作品を制作することを意味する。これは後述する行武治美《再構築》のように、他の場所では起こり得ない鮮烈な印象を残すことがある。この理念は直島の作品群にも共通し、2010年に始まる「瀬戸内国際芸術祭」に継承されていく。

⑤生活の集積が文化

「宮殿・城や邸宅、あるいは美術館に飾っておくもの」という従来のも美術品のイメージを打ち破り、日常生活で使っている道具や日用品、農機具、祭りや遊びまで「アート」として提示する。さらに空き家や廃校などその役割を終えた空間が舞台となり、必要とされなくなった物・捨てられた物に新たな命を与えた作品が誕生することになる。

1-2 瀬戸内国際芸術祭

2010年の「瀬戸内国際芸術祭」の中心となった直島は、香川県高松市の北約13km、瀬戸内海にある人口3000人余の島である。古くから海上交通の要所であり、戦国期には高原水軍の本拠地、江戸時代には回船業で栄えた歴史をもつ。島民の暮らしを支える漁業以外に、大正時代以降は貴金属を扱う三菱マテリアル直島精錬所が島の主要産業のひとつになっていた。

岡山・香川の双方から交通の便が良い島の再開発を目指したのが、岡山市に本拠を置く企業ベネッセ・コーポレーションである。1988年当時、福武書店の代表取締役社長だった福武総一郎(1945～)が、直島町議会で「直島文化構想」を発表。92年にオープンした直島コンテンポラリー・アート・ミュージアムを中心に、ホテル・キャンプ場を併設した複合体「直島文化村」が注目を集めることになった。その後、アーティストを島へ招いて場所を選んでもらい、そこでプランを立て制作する方法「サイト・スペシフィック」を導入し、大竹伸朗、草間彌生、杉本博司といった現代美術家が参加¹¹(図1)。さらに97年には「直島・家プロジェクト」がスタート、島内の集落・本村で使われなくなった古民家を修復して現代美術を展示し、アートを軸に村を再生する試みである。これには安藤忠雄、内藤礼、宮島達男等の日本人建築家、作家ばかりでなく、ジェームズ・タレルのような国際的に活躍する作家も加わり、現代美術の新しい潮流を方向づけることになった¹²(図2)。

こうした一連の流れを経て2010年に始まったのが、「瀬戸内国際芸術祭」である。「アートと海を巡る百日間の冒険」を標語に、7月19日から10月31日まで開催され、最終的には主宰者側の発表で94万近い入場者を集めた¹³。芸術祭の会場となったのは、直島、豊島、女木島、男木島、小豆島、大島、犬島、および高松港周辺で、18の国と地域から75組のアーティストやプロジェクトが参加した。「瀬戸内海の島々に活力を取り戻す」ことを目指す芸術祭の総合プロデューサーは福武総一郎、総合ディレクターとして北川フラムが加わり、香川県や高松市といった関係自治体の

支援を得てスタートした。越後妻有の「こへび隊」にあやかり、こちらでは「こえび隊」という女性中心のボランティア・グループが祭りの準備・運営に関わり、一定の成果を上げた。

2 2つの芸術祭の報告と作品検証

さて第2章では、前章で述べた芸術祭の理念が実際にどういう形で実現されているか、「大地の芸術祭」「瀬戸内国際芸術祭」の双方の作品について検証していくことにする。前者は「大地＝土」、後者は「瀬戸内海＝海」がそれぞれを特徴づける要素＝キーワードとなる。本章で取り上げる作品は便宜上、開催場所にしがたって、越後妻有はE、瀬戸内はSのイニシャルを付けることにする。すなわちEは越後 Echigo および大地を表す語 Earth の頭文字、Sは瀬戸内 Setouchi および海を表す語 Sea の頭文字である。

「大地の芸術祭」は約760平方キロの田園地帯に展開し、会場があまりに広範にわたるため、400点に及ぶすべての作品を見ることは地元住民でもない限り、まず不可能である。ここでは十日町・川西・中里・松代・松之山・津南の6地域のうち、十日町と松之山地区の作品を取り上げることにする。また「瀬戸内国際芸術祭」については、高松港に近い直島、男木島、女木島の作品を中心に考察する。今回、筆者が作品を概観した際に注目した特徴は、第1章で示した理念に基づく次の3点である。当然のことながら、複数の特徴を兼ね備えた作品もある。

- ①自然豊かな地元の産物や伝統的な技を利用し、地域住民の協力を得て作られた作品
- ②不要になったもの（農具や日用品）、使われなくなった場所（空き家や廃校）を利用した作品
- ③訪れた者が参加し、体験を共有することができる作品

①自然豊かな地元の産物や伝統的な技を利用し、地域住民の協力を得て作られた作品

E-1. 山本浩二（1966～）《フロギストン》2012 炭化彫刻 十日町・里山現代美術館（図3）

タイトルとなった「フロギストン phlogiston」という耳慣れない言葉は、酸素が発見される以前に、他の物質を燃焼させる役割を果たすと信じられていた仮説上の物質を意味する。と書くと、何やら解釈が難しそうな作品を連想するが、実際に十日町の里山現代美術館「キナーレ」に並ぶ木彫群を眺めると、自然がもつ力がストレートに伝わってくるとともに、人工的な雑木林に迷い込んだ錯覚に陥る。本作を制作するにあたり、作者はこの地域の多様な植物層をサンプリングし、ブナやカエデといった広葉樹18種類を入手、彫刻した後に炭化させるという手法を用いた¹⁴。炭と化した彫刻は、用いられた木材と同種の原木の台座に設置される。一見抽象的と思える形だが、あくまで有機的であり、火焰土器や楽器、あるいは動物の頭部といった様々なイメージを鑑賞者に提供する。越後妻有の人々に木材や燃料、ときには食材として恵みを与えつづけてきた広葉樹が、山本というアーティストの手を経て、新たな存在として生まれ変わっている。

E-2. 高橋治希 (1971 ~) 《蔓蔓まんまん》2009 磁器 / ワイヤー 中里**S-1. 高橋治希 《SEA VINE》2010 磁器 / ワイヤー 男木島 (図4、5)**

前者は、新潟県中越地震で被害を受けた中里・東田沢集落の家屋に設置され作品である。壁を白く塗り光が与えられた部屋には、磁器製の蔓がワイヤーで吊され、揺らめいている。花や葉に描かれた小さな風景は、この地区に住む約50人からヒアリングしたそれぞれにとっての「一番好きな場所」である。作家はその場所に出かけ、スケッチブック代わりに磁器の花を手に持ち、現場で釉薬によってスケッチしたという。

九谷焼を用いたインスタレーションで注目されつつある高橋治希は、作品の中に自然をどのように取り込むかを常に意識しているように思われる。「瀬戸内国際芸術祭2010」では、人口200人の男木島の空き家に、《SEA VINE》と名付けられた作品を発表。家の中に入ると、植物の蔓や葉、花の形でできた磁器製のパーツが、押し寄せる波のように室内に張り巡らされ、「水しぶき」が「花しぶき、葉しぶき」となって広がっている。開け放たれた窓からは、借景のように瀬戸内の海を眺めることができる。日本の伝統工芸である磁器とそこにある自然を利用しながら、斬新な作品が生み出されている。

S-2. 松本秋則 (1951 ~) 《音の風景：瀬戸内編》2010 竹 / 和紙 男木島 (図6)

松本秋則は、1980年代初めから音の出るアートにこだわってきた作家である。2010年の瀬戸内では、男木島の廃屋内に、まず和紙で壺庭のような空間を作り、島の竹林から採った竹を素材としたサウンド・オブジェを随所に設置した。かつては馬小屋や民家だった独特の雰囲気の中、素朴でどこか懐かしい竹の調べが奏でられる。また2012年の新潟市「水と土の芸術祭」では、海岸近くの松浜にスリットの入った竹を何本も突き刺し、風に受けて共鳴する《音の風景：松浜編》を発表している。作家のこだわりは音であり、地元産の素材である。

S-3. 漆の家プロジェクト (代表：北岡彰三, 1949 ~) 《黒い部屋》《白い部屋》2010 讃岐漆芸 男木島 (図7)

江戸時代から伝わる讃岐漆器(香川漆器とも呼ばれる)の技法を活用し、木造家屋をリノベーションする試みである。讃岐漆器には色漆を何層も塗り重ねてから彫り、色彩豊かな模様を生み出す「彫漆」という技法が伝えられてきた。《黒い部屋》では、黒漆の壁面にこの精密な技を用いられ、夜空の星のような模様が浮かび上がる。一方《白い部屋》では、押入れの引き戸部分に漆が施されている。白と朱の漆を塗った木製テープを編み、組み合わせることで、リズム感あふれる幾何学模様が創出された。いずれも地元工芸の技が、現代的な感覚の表具に利用された例といえる。

S-4. 西堀隆史 (1973 ~) 《うちの骨の家》2010 竹製うちの骨 男木島 (図8)

香川県中部部に位置する丸亀市は、竹製の「丸亀うちの骨」の産地であり、現在でも全国生産量の

8～9割のシェアを誇るという。その起源は江戸時代にあり、当時は武士の内職として流行り、伊予（愛媛県）の竹、土佐（高知県）の紙、阿波（徳島県）の糊を利用した「讃岐のうちわ」はその後も地場産業として定着した。一時は安価なプラスチック製の柄に主役の座を奪われたが、1本の竹を割って柄と骨の部分を作る手法はこの土地独特のものであり、最近のエコブームも後押しされて再び見直されている¹⁵。西堀の《うちわの骨の家》は、元は駄菓子屋だった空き家を借り受け、うちわの骨を多数組み合わせたインスタレーションである。竹の細い骨が重なり合うことで、視覚的に、レースの布を天井から壁に貼り巡らせたような効果を演出する。

②不要になったもの（農具や日用品）、使われなくなった場所（空き家や廃校）を利用した作品

S-5. 川島猛とドリームフレンズ《想い出玉が集まる家》2010 新聞／雑誌／ちらし／手紙など 男木島（図9）

「想い出玉」とは、新聞や雑誌、チラシ、包装紙などによる球状のオブジェのこと。男木島の各家庭に眠っている捨てられない手紙や日記など想い出のつまった紙を持ち寄ってもらって「想い出玉」を住民たちと制作し、住宅の玄関や門、廊下や壁、軒下など随所に展示を行う。また、来場者もこの家で「想い出玉」が制作でき、作品の一部として設置される。会期中、さまざまな人々の「想い出玉」は次々と増殖していく。不要になった材料を使いつつ、体験型の試みでもある。

S-6. 乳母ファクトリー《オンバ・ファクトリー》2010 乳母車ほか 男木島（図10）

坂道や細い路地が多い男木島で、高齢者を中心にオンバ（乳母車）が利用されることに着目し、5人のメンバーから成る「オンバ・ファクトリー」が開設された。住民が所有するオンバは、本人からのヒアリングに基づいて修理やペイントを施し、糸車やテントウムシなどユーモア溢れる形の「マイ・オンバ」となる。実際に日常の暮らしで使ってもらい、宣伝効果もあるという。

S-7. 淀川テクニク《宇野のチヌ》2006 廃物ほか 宇野港（図11）

現代美術のひとつの潮流として、既製品の廃物を寄せ集めて作る「ジャンク・アート」と呼ばれる作品群がある。自動車の部品を集めて圧縮したセザールの「プレス彫刻」、日用品の廃物をモーターで動くキネティック・アートに仕立てたティンゲリーの作品など、大量生産とその結果としての廃棄を表象する辛口タイプだ。

柴田英昭（1976～）と松永和也（1977～）が結成したアート・ユニット「淀川テクニク」は、それと基本的な理念を同じくする二人組である。2003年に結成され、大阪の淀川に浮かぶゴミや漂流物を材料にしたアート作品（garbage based sculpture）の制作からスタートした。活動は海外にも広がり、2008年インドネシアのジョグジャカルタ、2009年にはドイツのハンブルクへ赴き、その土地で出たゴミを利用した作品制作を続けている¹⁶。

岡山県から瀬戸内の島々への向かう際の玄関となる宇野港に、高さ2メートルを越えるチヌ（ク

ロダイ)をかたどった巨大なオブジェがある。タイヤやゴム・プラスチック製品など廃棄物が種類毎に分けられ、カラフルに彩色されてアート作品となり、生まれ変わった。それは大量に生産し廃棄する現代の消費社会の縮図と見ることもできる。一方で彼らは2011年、東日本大震災で甚大な津波被害を受けた宮城県仙台市若林区で、地元住民の協力を得て、被災した防風林の倒木や廃材を使った作品《若林100年ブランコ》を完成させた。時流を敏感に感じ取り、作品に反映させることが、現代美術に課せられた使命のひとつとなっている。

E-3. シュタイナー (1967～) & レンツリンガー (1964～) 《ゴースト・サテライト》2012 廃材、生活用品、農具等 十日町・里山現代美術館 (図12)

越後妻有を「日本の中心から遠く離れて存在する衛星」と感じた作家は、その存在感や力強さを表現しようと試みる。現地で取材した雪国での生活の知恵や伝承されたお話、怪談、空き家や廃校の様子、打ち捨てられた道具類などから想を得て、美術館エントランスの吹抜け空間を飾る複数の作品を完成させた。竹ざるや金属・プラスチック製品で構成された作品は、昆虫や鳥となって飛翔する。来場者はそれを2階から眺め、あるいは1階から仰ぎ見ながら、様々なイメージを膨らませていく。

E-4. 行武治美 (1966～) 《再構築》2006 ミラーガラスほか 十日町 (図13)

S-8. 行武治美 《均衡》2010 ミラーガラス、ケーブルほか 女木島 (図14)

十日町市の南、当間高原リゾートに近い道路沿いを進むと、草むらの中に陽光を浴びて光る物体が出現する。近寄って見ると、廃屋に何千枚もの鏡が貼り付けられている。最近の都市では全面ガラス張りのビルを見かけることがあるが、これは手作業で切り抜かれた鏡であり、周囲の樹木や草を映し込んで、巨大なジグソーパズル、あるいはモザイクのような印象を与える。草が繁茂する山里の自然の中だからこそ、硬質なガラスの鏡の存在が際立つ。

日本とアメリカの大学でガラス工芸を学んだ行武治美は、「瀬戸内国際芸術祭2010」では、女木島の古い納屋を会場に《均衡》という作品を展示した。今にも崩れそうな建物の内部に入ると、薄暗い空間にミラーボールのように煌めく作品が現れる。これは短冊状のミラーガラスを1万個以上準備し、天井からステンレスのケーブルを用いて張り巡らしたものである。鏡の一つひとつは小さいが、よく見るとそこに自分自身の姿が映り、光の滝壺の中にいるような不思議な感覚に陥る。

十日町、女木島の両作品とも古い建物を基底材と考え、そこにガラスという素材を自由にカットし、貼ったり繋げたりして作り上げた大作である。前者は晴天時には陽光をたっぷり浴びる屋外、後者は建物の隙間から光が漏れる程度の薄暗い空間という違いはあるが、カットされたガラスを使用することで人工的な光の効果が演出されている。時を経て古びた建物と変わることのない自然の対比を感じさせ、太陽の光を利用しつつ、作家の手で新たな輝きを得たガラスの作品。「ものごとは二律背反したもののバランスの組み合わせで成り立っている」という、作家の基本的なコンセプト

トが見事に具現された作品群である。

E-5. 塩田千春 (1972 ~) 《家の記憶》2009 毛糸、本、日用品ほか 松之山 (図 15)

S-9. 塩田千春 《遠い記憶》2010 廃材ほか 豊島 (図 16)

前者は2009年、前回のトリエンナーレの際に作られた。ベルリンに在住する作家は越後妻有に2週間滞在し、松之山地区にある空き家の1階から2階の天井裏に至るまで、黒い毛糸を張り巡らせた。使われた毛糸玉は約550個、毛糸の総延長は44kmに及ぶ。クモの糸に覆われたような室内をよく見ると、ワラ靴や蓑、日用品や本類がぶら下がっている。地元の人たちが実際に使っていたもので、「いらなくても捨てられないもの」だという。松之山地区の山間にあるこの集落では、従来から人口が減り続けていたが、2004年10月23日の新潟県中越地震、および2011年3月12日の長野県北部地震（信越地震）で家屋の一部に被害を受け、それが直接の原因となって村を離れる人が増え、空き家が目立つようになってきた。作品の舞台となった家も修理を重ねながら住み続けた跡が今も残り、塩田がこだわる「記憶を留める」場所にふさわしい。

塩田は「瀬戸内国際芸術祭2010」では、豊島の甲生地区に《遠い記憶》と題する作品を制作している。作家自らインタビューに答え、こう説明している。「島で集めた廃屋の窓600枚でトンネルのような作品をつくりました。豊島は文字通り豊かな島なのですが、住民は産業廃棄物の問題で苦しんできました。その場所で作品を作ることを考えたときに、展覧会をする、というのはゴミを生み出すことにもなると思いました。私はできるだけ外から作品を持ち込むのではなく、島にあるものを使って制作したいと思い、その産業廃棄物の問題もあえて隠すのではなく、その問題も頭にふまえて、この島をもっと知った上で作品を作りたいと思いました」¹⁷。

新潟県十日町市松之山の《家の記憶》にしろ、香川県豊島の《遠い記憶》にしろ、設置された場所は車や自転車、徒歩で行くしかない不便な場所にあり、しかもそのまま放置すれば「ゴミの山」になりかねない作品である。都会の便利な場所にある空調のきいた美術館で鑑賞する作品の対極にあるとって過言ではないだろう。果たしてそこまで苦勞して見に行く価値があるのだろうか、また作品自体がほんとうにアートといえるのだろうか。こうした芸術に関する究極の問題を提起する作品群である。

③訪れた者が参加し、体験を共有することができる作品。《豊島美術館》以外は②の特徴、つまり不要になったものや使われなくなった場所を利用している。

E-6. ボルタンスキー (1944 ~) 《最後の教室》2006 松之山・旧東川小学校 (図 17)

E-7. ボルタンスキー 《No Man's Land》2012 十日町・里山現代美術館 (図 18)

フランス、パリ出身のクリスチャン・ボルタンスキーは、正規の美術教育を受けたわけではないが、若い頃から「生と死」「ホロコースト」「人間の記憶」といったテーマで、オブジェやインスタレーションを発表しつづけてきた。1993～94年にケルン市で発表された《この子らは両親を探している》

は、行方不明の子供たちの写真を用いた作品で、彼の作風を代弁しているだろう。日本とも関連が深く、2003年の「越後妻有アートトリエンナーレ」では、ジャン・カルマンとともに、廃校になった松之山の東川小学校を展示場所として選び、《夏の旅》を制作。椅子や机に白い布を被せた音楽室、子供たちの普段着が吊された教室など、最盛期には400人もいたという小学生たちの存在の記憶が蘇る¹⁸。

そして2006年の「大地の芸術祭」では、同じ小学校校舎を使った《最後の教室》が制作され、今回2012年も見る事ができた。新しい計画を詰めるために作家が現地を訪れたのは2006年の冬であり、記録的な大雪に閉ざされた地域と校舎を実体験し、その孤立感が作品で増幅されている。かつての体育館が入口となっているが、薄暗いために外から入ってきた客はほとんど何も見えず、ワラを敷き詰めた床を恐る恐る歩いて前進する。2階、3階の教室を巡って再び体育館に戻ると、長椅子に置かれた扇風機が微かな音を立てて回っていることに気づく。この微かな音こそ、ボルタンスキーの作品を特徴づけるものの一つとなっている。

ボルタンスキーは2008年以降、人々の心臓音を記録するプロジェクトを開始。「瀬戸内国際芸術祭2010」では、豊島で《心臓音のアーカイブ》という作品を発表した。これは心臓音に合わせて電球が明滅するインスタレーション、世界中で集めた心臓音を聞くことができる視聴室、さらに希望者の心臓音を録音する部屋まであり、「生きている証」として心臓の鼓動が作品の要となる。

この心臓音は2012年の「大地の芸術祭」のインスタレーション《No Man's Land》において、より効果を発揮している。同年、里山現代美術館「キナーレ」として十日町市に蘇った建物に入場すると、中庭に設置された巨大なクレーンに驚かされる。9トンに及ぶ古着が山のように積まれ、それをクレーンがつまみ上げ、また落として行くという規則的な作業を続ける。そして耳に聞こえて来るのは、規則的に響く心臓音なのである。作品の背後にあるのは何か、古着は何を意味するのか、ホロコースト？誘拐された子供たち？それとも津波で流された人々？ 想像は際限なく広がるが、作家は明確な答えを与えてくれない。

S-10. 谷山恭子 (1972～) 《雨の路地》2010 鍋 / 洗面器 / やかんほか 男木島 (図19)

瀬戸内海は年間降水量が少ない土地柄である。かつて男木島では、水が不足すると山の上の井戸まで水を汲みに行く必要があったという。そうしたエピソードに由来し、本作は島の生活と大切な水との関係を示唆する。昇り道の傍らに鍋やたらい、バケツなどが配置され、一日に数回、正時になると貯まった水が放たれる。晴れの日も雨が降る光景を実現し、来訪者はその瞬間を共有することになる。

S-11. 谷口智子 (1970～) 《オルガン》パイプ管 / 望遠鏡 / 潜望鏡ほか 男木島 (図20)

高低差が大きく、立体迷路のように入り組んだ男木島の路地に、パイプが配管されている。それは水路や民家の敷地を通り、数十メートル離れた先の人の話し声や風の音が聞こえてくる。望遠鏡

や潜望鏡が組み込まれたパイプを覗くと、瀬戸内海の光景や詩の一部が現れたりする。パイプに沿って歩くと、楽しくて発見のある体験ができる仕掛けである。

S-12. 西沢立衛（1966～）《豊島美術館》+内藤礼（1961～）《母型》2010 地下水、コンクリート、石ほか 豊島（図 21）

瀬戸内海を望む豊島・唐櫃（からと）地区の小高い丘に、西沢立衛の設計による《豊島美術館》が「瀬戸内国際芸術祭」に合わせて、2010年にオープンした。休耕田となっていた棚田を地元住民とともに再生させ、その広大な敷地の一角に不思議な形の建物が設置された。広さ40×60m、最高高さ4.5mの空間に柱が1本もないコンクリート・シェル構造であり、天井にある2箇所の開口部から、周囲の風、音、光を内部に直接取り込んでいる。中に入ると、美術館というのに何も無い。しばらく待つと、床のあちらこちらで、水が泉のように湧き出ているのが観察できる。小さな水滴は微妙な傾斜の床を移動し、やがて集まって水溜まりとなる。水溜まりの形は常に変化し、そのときの天候や光の具合も相まって、来訪者を飽きさせない。忙しい現代人がしばし動くことをやめ、五感を働かせて体験する作品。それが内藤礼の生み出したインスタレーション《母型》の基本理念であろう。

E-8. クワクポリヨウタ（1971～）《LOST #6》2012 鉄道模型 / LED 照明 / 糸車 / 織機 / 日用品ほか 十日町・里山現代美術館（図 22）

メディア・アーティストのクワクポリヨウタは、明和電機との共作《Bitman》以降、主にエレクトロニクスを用いて、機械と人間との関係を提示する作品を発表している。彼にとってターニング・ポイントになったのが、2010年に発表した《10番目の感傷（点・線・面）》（NTT Inter Communication Center）であることは間違いないだろう。暗い部屋にレールが引かれ、小さなLED照明を搭載した鉄道模型がゆっくり移動するに従って、床に置かれた様々な物の影が壁に投影され、鑑賞者は動く影絵を見ることになる。床にあるのは鉛筆や空き箱、水切りざるといった日常ありふれた物ばかりなのだが、影の思いがけない大きさや形に驚かされ、虚構の空間にいる自分を意識し、その体験を楽しむことができるのである。作家がいうところの「作品と過ごす時間の大切さ」が、その後のクワクポ作品の方向性を決めることになった¹⁹。

一方、2012年の「大地の芸術祭」に際して、十日町の現代美術館「キナーレ」で発表されたのが《LOST #6》である。黒幕を開けて暗い部屋に入った来場者は、壁や天井に映し出されて刻々変化する幻想的な影絵を見ることになる。基本的なコンセプトは《10番目の感傷》と変わらないが、床に置かれたのはこの地域で使われてきた織物機具の一部や竹籠などの日用品である。人々の営みを支えた道具が鉄道模型の光に照らされてできる影絵に、ある人は地域の風景と重ね合わせ、またある人は郷愁を伴う窓外の風景を思い起こすになる。

以上、20点ほどの作品を概観することで、2つの芸術祭に共通する要素・特徴を検証した。都

会から離れた山里あるいは島の特質を活かした作品を生み出すことが、作家と地元住民に共通した目標のひとつであろう。そして芸術祭として成功させるには、それを支える人々のパワーが不可欠である。

3 問題点の指摘と今後の課題

2010年に実施された「瀬戸内国際芸術祭」に関しては、実行委員会による詳しい総括報告が同年12月に公表されている²⁰。この章では、そのいくつかの項目について検証することで、次期開催に向けた課題を筆者なりに指摘することにする。なお具体的な数字や内容は、すべてこの総括報告に基づいている。

(1) 来場者数

前述したように来場者数は当初の予想をはるかに越え、総来場者数は938,246人と発表されている。会期は7月19日～10月31日であったが、夏休みよりも会期後半に評判を聞きつけて訪れる人が増え、土日祝日には1日で2万人を越える来場があったという。さらに来場者の属性の分析がなかなか興味深い。報告書によると、

- ・男女別では、女性が7割、男性が3割となっている。
- ・年齢別では、10代～30代の若年層が7割を占める。
- ・県内からの来場者が3割、県外が7割となっている。
- ・全ての都道府県からの来場があった。
- ・地域別では、関東・関西が4割、香川・岡山が4割となっている。
- ・外国からは、台湾、アメリカ、オーストラリア、フランスなどが多い。

今回は広報活動が非常にうまく機能しており、地元、日本国内のみならず、海外でも新聞、雑誌、放送など様々なメディアで紹介された。また公式ウェブサイトが早くから立ち上がり、携帯電話などモバイル環境からのアクセスが8割近くを占めていた。さらにツイッターを活用したプロモーションを積極的に行ったために、若者間で芸術祭の評判が一気に広がったと考えられる。こうした新しいツールや積極的な広報活動が、今後の芸術祭を成功に導く上で有効であることはいうまでもない。

(2) 交通アクセス

芸術祭期間中、7つの島では原則マイカーの乗り入れできないので、来場者は宇野港か高松港などから船で島へ渡り、島内はバス、自転車、徒歩で回ることになった。高松港を起点に4区間で増便が行われ、また島々を結ぶ新規の航路が開設されたが、多くて1日9便、少ないと3便では、土日を中心に客をさばき切れない事態も発生した。またアップダウンの多い島内の移動は、自転車・徒歩の場合、想像以上に重労働である。循環バスを増発して走らせ対応したが、週末の混雑日には希望者が乗り切れないケースもあった。越後妻有でもまったく同様であるが、もともと交通の便がさほどよくない地域での芸術祭開催は、足の確保がまず第一であり、今後も最重要の課題となるだ

ろう。

(3)こえび隊

「瀬戸内国際芸術祭」では「大地の芸術祭」の「こへび隊」と同様に、ボランティア・サポーターのグループ「こえび隊」が組織された。報告書によれば、運営に関わった実働人数は約700人、述べ人数では約5,000人に及ぶ。全体の約7割が女性で、平均年齢は30.3歳である。都会の学生中心の「こへび隊」とは異なり、全国から集まった幅広い層のボランティアが芸術祭を支えた。「こえび隊」は登録制度を取り、ホームページを立ち上げて、常時メンバーを募集している²¹。昨年11月の時点で登録人数は2,606人。来春の芸術祭開催に際して、作品制作の手伝い、芸術祭のPR活動、期間中の運営や催しの支援を目指して、すでに活動が始まっている。実際に作品制作する作家、地元住民に加え、こうした無償の労働を喜びと感じる人々のマンパワーが、芸術祭開催に不可欠となりつつある。

(4)島民へのアンケートと評価

芸術祭が終了した直後の11月に、すべての島で自治会等との意見交換会が行われ、また作品を設置した島民へのアンケート調査が速やかに行われたことは注目に値する。「総括報告書」によれば、回答した513名のうち、芸術祭に対する開催前の期待度は69%だったが、開催後は88%が自分の地区に作品が設置されて良かったと思い、82%が芸術祭は地域活性化に役立ったと考えている。具体的な意見として「都会の若い人と話ができ、皆生き生きとしていた（豊島）」「島がこんなに賑わい活気づいたことはこれまでなく、本当に皆元気をもらった（女木島）」「アーティスト、こえび隊とのつながりができ、これからもそれを大切にしていきたい（男木島）」といった肯定的な意見が多いが、会期中の混雑ぶり、島内の宿泊施設の不足、105日間という会期の長さを問題視する意見も散見された。

とくに印象的なのが、「7～8月は若い人中心でマナーが良く、ゴミもほとんど落ちていなかったが、9～10月になると客層が変わり、マナーが悪くなった（女木島）」という意見である。つまり会期後半にやってきた団体客の一部に、そうした傾向が見られたということであろう。確かに来場者数を増やすには、団体客を呼び込むことが手取り早い方法である。しかしながら、ただでさえ狭い島が列をなして歩く人々で占拠される状況は極力避けるべきであろう。私見として、受け入れるのは個人客のみという原則を貫いてよいのではないかと考える。2013年の芸術祭開催に向けて、こうした問題に対して主宰者側がどのような方針を打ち出すのか、見届けたい。

エピローグ

「大地の芸術祭：越後妻有アートトリエンナーレ」は2012年開催で5回目となり、拠点となる建物の建設など確実に進化しつつある。しかし展示場所のわかりづらさ（標識や地図の問題）、地域内の移動の困難さ、食事場所や宿泊施設の不足など、ハードの面で改善の余地があるものは多い。それを補うのが作品の質の高さであり、地元住民やボランティアの支援者たちのマンパワーである

う。今回の報告書はまだ公表されていないが、問題点をどう解決し次の開催につなげていくか、その成果が試される²²。

一方、「瀬戸内国際芸術祭」は2013年に第2回を開催されることが決まり、すでに準備がスタートしている。瀬戸内の四季を体験してもらうために、会期は春・夏・秋の3シーズン設定され、2013年3月20日に春シーズンの開幕が予定されている²³。これにより長すぎる会期の問題は、一応解消されるだろう。現代美術による地域おこしで一定の成果を出した直島をモデルケースとして、作家の招致や広報活動などすでに十分なノウハウを持っている。2回目は前回の開催エリアに加えて、香川県西部の5つの島々（沙弥島、本島、高見島、栗島、伊吹島）が参加するという。新規参加の島々での立ち上げのみならず、前回開催した地域でいかに持続的に活動を続けていくかが、今後の最重要課題のひとつになるだろう。

芸術祭参加作品の中には、終了後撤去せざるを得ないものもあるが、そればかりでは余りに寂しい。サイト・スペシフィックな作品をいかに半永久的に残していくかも、主催者に課せられた問題である。芸術祭を文字通り一時の祭りに終わらせず、それに繋がる人々の関係や作品自体を維持してこそ、「現代美術による町おこし」が可能になると信じる。

「大地の芸術祭2012」の総括報告書と「瀬戸内国際芸術祭2013」の開催を期待しつつ、筆者自身もまた今後、研究対象として取り組む課題を見つけていきたい。

註

¹ 最近の例をあげると、東京国立博物館「写楽」2011年5～6月 / 「北京故宫博物院200選」2012年1～2月 / 「ボストン美術館：日本美術の至宝」2012年3～6月、国立西洋美術館「大英博物館：古代ギリシャ展」2011年7～9月 / 「レンブラント」2011年3～6月、国立新美術館「ワシントン・ナショナル・ギャラリー展」2011年6～9月 / 「大エルミタージュ美術館展」2012年4～7月、東京都美術館「マウリッツハイス美術館展」2012年6～9月など。

² 東京現代美術館「クラウドスケープ」2011年12月～2012年3月 / 「田中敦子」2012年2～5月、国立新美術館「具体：ニッポンの前衛18年の軌跡」2012年7～9月など。

³ 2つの芸術祭に関する基本的な情報は、以下の公式ガイドブック、およびホームページに拠っている。

『大地の芸術祭：越後妻有アートトリエンナーレ2012公式ガイドブック』美術出版社、2012

『瀬戸内国際芸術祭2010完全ガイド』美術出版社、2012

<http://www.echigo-tsumari.jp/>

<http://setouchi-artfest.jp/>

⁴ 北川フラム『大地の芸術祭』角川学芸出版、2010、p.6.

⁵ 北川フラム『希望の美術・協働の夢：北川フラムの40年1965-2004』角川学芸出版、2005、pp.282-286.

⁶ 村田真「新たな段階に入った？—大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレ2012」artscape、2012年08月15日号 http://artscape.jp/focus/10046815_1635.html

⁷ 北川、2010、pp.10-16.

⁸ 北川、2005、pp.14-18.

⁹ 北川によれば、「こへび」とは脱皮を繰り返しながら成長していく子供の蛇であり、その存在を見守り、手

助けする社会人の「おおへび隊」も作られた。

- ¹⁰ 2000年カバコフ（ウクライナ）、2003年アントナコス（ギリシア）/ヴィルムート（フランス）、2003/2006/2012年ボルタンスキー（フランス）、2012年イ・ソンラク（韓国）ほか多数。
- ¹¹ 具体例をあげると、大竹伸朗《Shipyard Works》1990、片瀬和夫《茶のめ》1987-94、草間彌生《南瓜》1994、カレル・アベル《蛙と猫》1980など。
- ¹² 「家プロジェクト」の初期の例として、宮島達男「角屋」（液晶カウンターを用いたインスタレーション）1997-98、安藤忠雄+ジェイムズ・タレル「南寺」における《Backside of the Moon》1999、杉本博司「護王神社」（ガラスの階段で結ばれた石室と本殿）2002をあげておく。
- ¹³ 来場者数は、来場者の客数（頭数）としてではなく、島ごとの実来場者数の合計値となっている。例えば1人が2泊3日で3島を訪れた場合（客数は1）は3として計上されているので、一人平均3島を訪れるとすれば、実人数は30万人前後であろう。註20の総括報告に基づく。
- ¹⁴ 『越後妻有里山現代美術館2012作品図録』2012 里山現代美術館 pp.38-41.
- ¹⁵ 丸亀うちわ http://www16.ocn.ne.jp/~polca/j_top.html
- ¹⁶ 淀川テクニクの活動について http://yukari-art.jp/jp/yodogawa_technique
- ¹⁷ ARTit 2010/09/10 塩田千春インタビュー
http://www.art-it.asia/u/admin_ed_itv/i2vWjzhgHI7kLYVuxMA8
- ¹⁸ 北川、2010、pp.140-149.
- ¹⁹ 作家へのインタビュー interview and text by 原田優輝
<http://public-image.org/interview/2011/07/05/ryotakuwakubo.html>
2010年10月、東京ステーションギャラリーのリニューアル・オープン展「始発電車を待ちながら」で、クワクボは同シリーズの最新作《LOST #8 (tokyo marunouchi)》を発表している。
- ²⁰ 瀬戸内国際芸術祭 2010 総括報告 2010年12月20日
http://setouchi-artfest.jp/images/uploads/news/report_20101220.pdf?phpMyAdmin=gNjNmhVJRLYT7iuP9yuy4WUpBx3
- ²¹ 「こえび隊」のホームページ <http://www.koebi.jp/about/>
- ²² 過去4回の「大地の芸術祭」総括報告については、以下のホームページを参照のこと。www.city.tokamachi.niigata.jp/page/000013097.pdf
- ²³ 春:3月20日(水)～4月21日(日)、夏:7月20日(土)～9月1日(日)、秋:10月5日(土)～11月4日(月)に開催の予定。

【図版リスト】

1. 草間彌生《南瓜》1994 直島
2. 宮島達男《Naoshima's Counter Window》1998 直島・本村
3. 山本浩二《フロギストン》2012 十日町・里山現代美術館
- 4&5. 高橋治希《SEA VINE》2010 男木島
6. 松本秋則《音の風景：瀬戸内編》2010 男木島
7. 漆の家プロジェクト《白い部屋》2010 男木島
8. 西堀隆史《うちわの骨の家》2010 男木島
9. 川島猛とドリームフレンズ《想い出玉が集まる家》2010 男木島
10. 乳母ファクトリー《オンパ・ファクトリー》2010 男木島
11. 淀川テクニク《宇野のチヌ》2006 宇野港
12. シュタイナー&レンツリンガー《ゴースト・サテライト》2012 十日町・里山現代美術館
13. 行武治美《再構築》2006 十日町

14. 行武治美《均衡》2010 女木島
15. 塩田千春《家の記憶》2009 松之山
16. 塩田千春《遠い記憶》2010 豊島
17. ボルタンスキー《最後の教室》2006 松之山・旧東川小学校
18. ボルタンスキー《No Man's Land》2012 十日町・里山現代美術館
19. 谷山恭子《雨の路地》2010 男木島
20. 谷口智子《オルガン》2010 男木島
21. 西沢立衛+内藤礼《豊島美術館》2010 豊島
22. クワクポリョウタ《LOST #6》2012 十日町・里山現代美術館

***図版写真クレジット**

- 3, 12, 18, 22 中村脩 Osamu Nakamura
13 倉谷拓朴 H. Kuratani
15, 17 宮本武典+瀬野広美 Takenori Miyamoto + Hiromi Seno
それ以外は筆者撮影



図 1

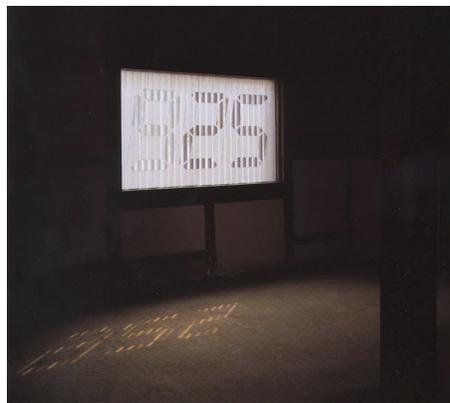


図 2



図 3



図 4



図 5



図 6



図 7

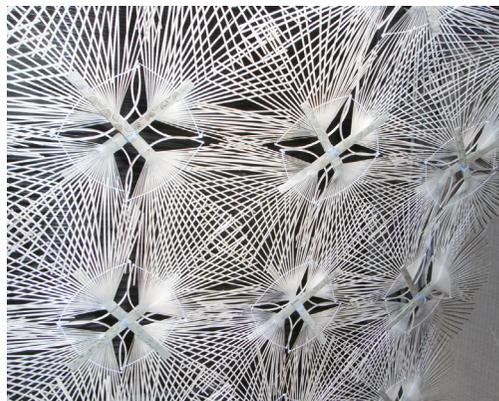


図 8



図 9



図 10



図 11

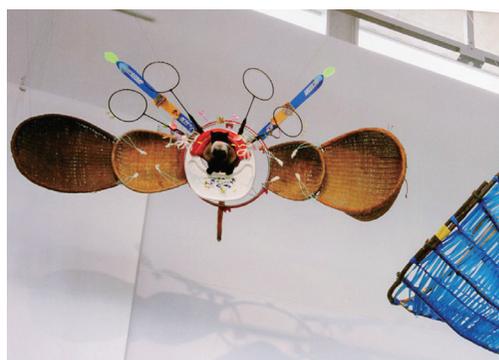


図 12



図 13



図 14



図 15



図 16



図 17



図 18



図 19



図 20



図 21



図 22